

## 里山シンポジウム 分科会報告



司会:それぞれの分科会が2分半の時間で発表をお願いします。

### 1 水田・稲作



水田稲作分科会では4月23日茂原市の茂原農業高校文化ホールで分科会を開催しました。分科会では、生き物の

視点から田んぼを見直し、千葉県の水田農業を環境創造型へ転換してつための方向性を、次世代を担う高校生を交えて検討いたしました。シンポジウムでは初めに、茂原農業高校農業土木部が部活動で実践している、一宮町で30年間放棄された谷津田再生の取り組み状況を報告、荒れた谷津田を再生させた時の達成感、生き物が戻ってきたときの驚きと喜び、その方向性がこれから千葉県での農業を楽しくやりがいを感じられる農業のあり方であることを、高校生から改めて思い知らされました。



つづいて、宮城県立田尻高等学校教諭の岩瀨成紀さんから

は、「ふゆみずたんぼの生きもの曼荼羅」と題し、基調講演をしました。岩淵さんは生き物を活用した農法を例に挙げ、自然を大切にすることを農業に感じられるようにすることが大切だと思う、と語りました。

ミニコンサートでは村おこしシンガー田中卓二さん、音楽とトークにより田んぼと自然再生について楽しみながら理解を深めました。

パネルディスカッションでは、田んぼの仕事でも、今効率化のために、一人一人が孤立化してしまい、人間関係が崩れてしまった、人間関係の再構築が必要だということや、農業は重労働のイメージだが、毎日違った自然に出会える楽しみがあるという話がありました。以上まとめとして、千葉県の水田農業を環境創造型へ転換していくためには、高校生のような若い力、農村社会の人間関係の再構築、農業をしながら自然をみる精神的なゆとり、その地域にあった人と自然が共生できる農業の方法や技術の確立、以上4つが必要であるとわかりました。以上で報告を終わりにします。

## 2 生物・ピオトープ分科会

### 2 生物・ピオトープ分科会

生物・ピオトープ分科会では、谷津田と里山における生物多様性の体験ということで、5月1日に千葉市緑区下和田でイベントを行いました。

**2. 里山と生物・ピオトープ**  
～谷津田・里山における生物多様性の体験～

1 観察会と生き物調査

実施日：2005年5月1日(日)  
10:00～12:30:観察会と生き物の調査実践  
14:00～15:30:こどもたちの企画による谷津田・里山遊び

参加者：70名(2～75歳)

●趣旨  
人が適度に手を加えることによって、  
生物多様性が維持されている『里山の自然』

<昨年>データをあげて学術的に評価  
<今年>  
・観察会・生きもの調査 → **生物多様性体験**  
・こどもの企画で里山遊び  
↓  
**里山＝安全で楽しい遊び場**




この場所は千葉市が以前調査した63箇所の谷津田のうち、最も自然度の高い、生き物が豊富だと評価されている場所です。

生物・ピオトープ分科会は、「人が適度に手を加えることによって、生物多様性が維持されている『里山の自然』」というメインテーマを掲げております。昨年は、それについてデータを挙げて学術的に評価しました。今年は観察会や生き物調査をとおして里山の自然を体験してもらうことにしました。その中で、子どもが企画した里山遊びを実施し、里山が安全で楽しい遊び場だということを検証してみました。

(スライドを観ながら)これが観察会なんですが、午後は、子ども達が企画した谷津田里山遊びということで、子ども達が全部企画しました。中学1年生の高山翔くん、小学4年生の生の千春ちゃんと瑞紀ちゃん、年長のげんちゃん

で、この子どもたちが3つくらいイベントを考えました。気が付いてみたら、谷津田里山は生き物だけではなくてこのような子ども達も育てていたということです。この子どもがここの谷津田に関わったのは4～5年前からで、この子(げんちゃん)なんかオムツをはきながら参加していました。

**午後は、こどもたちが企画した谷津田・里山遊び**

谷津田・里山は、  
生きものだけでなく、  
こどもたちも育てていた



こどもスタッフ




人も生物多様性の要素

●課題:同様の活動を他地域で実践していくには...

課題としては、同様の活動を他の地域でどのように実践していったらよいか、非常に大変だなあと感じました。以上です。

## 3 里山と教育・学習

教育・学習分科会は、我が国生活文化の伝承。幼少期に里山の自然に触れ、「情緒・感性」を育てる観点で「里山と子ども」という命題を実践しています。

**3. 里山と教育・学習分科会** 代表:上善 韓男  
「里やまは人づくりの場」

●野外体験1  
『里やま 農業・野菜調理と講演』  
千葉市立みつわ台北小学校 4月29日(日) 参加105名  
・講師:小宮直也(千葉後援センター次長)  
亀井理(千葉経済大学附属高等学校教諭)

●野外体験2  
『生態園での自然教育実践』  
千葉県立中央博物館生態園 5月7日(土) 参加25名  
・講師:中村俊彦(千葉県立中央博物館副館長)  
株式会社千葉市立中央博物館(研究科)  
亀井理(千葉経済大学附属高等学校教諭)  
寺崎真希(森林文化教育研究センター)

●シンポジウム  
『自然体験はオマケじゃない』  
千葉県立中央博物館講堂 5月7日(土) 参加132名

- ・里山と環境教育の意義:大橋幸一郎(千葉県副知事)
- ・自然体験はオマケじゃない理由:  
中村俊彦(千葉県立中央博物館副館長)
- ・里山は人づくりの場:亀井理(千葉経済大学附属高等学校教諭)
- ・パネリスト: 亀井理(千葉経済大学附属高等学校教諭)  
中村俊彦(千葉県立中央博物館副館長)  
浅野誠(千葉県立精神医療センター長)  
浦上昌(森林インストラクター)
- ・総合司会: 鈴木真(NPOみどりのネットワーク千葉)

・コーディネーター: 山口朝夫(森林文化)  
・MC: 上善 韓男: 自然体験の  
たいよう保育園の職員のみなさん  
たいよう保育園の職員のみなさん



『自然体験はオマケじゃない』シンポジウム



なまき保育園 たいよう保育園の職員による  
「わらわら」でシンポジウムの会場が和む

4月29日《緑の日》千葉市若葉区みつわ台北小学校をベースに近隣の東寺山、原町、源町など里山を訪ねました。この日原町の谷津田では田の神、水の神に豊作を祈願する神事があり、集落の方々と交歓する一幕もありました。観察後は採取した野草を家庭科教室で調理。参加した105名が自然の恵みに感謝しました。

5月7日(日)千葉県立中央博物館(132名参加)午前は生態園で草木遊びなど子ども向けの遊びを修得。午後は講堂でシンポジウム「自然体験はオマケじゃない」をテーマに4人の発表者がパネル討議を行いました。冒頭大槻副知事が挨拶し、千葉県里山条例誕生の逸話を紹介。中村副館長が、大脳と自然体験の密接な関わりを講演。筒井

東大名譽教授が「里山は人づくりの場」と題して基調講演を行いました。(休憩時。たいよう保育園、なぎさ保育園の園児が60名がわらべうたを披露し、会場の観客を和ませました)

(まとめ)

〔現状〕物が豊かになった半面、心の問題が深刻化。キレル子ども、引きこもりの増加。子どもの遊びは、ファミコンなど屋内が増加し自然体験などの屋外が減少。

〔結論〕里山の自然の豊かさが人の心を育てる。子どもの遊び「自然体験の、時間空間、仲間」など三間の確保は大人の責任。農林業など基層文化の根を腐らせてはならない。里山の疲弊は都市の凋落へ。自然体験は教育のオマケではない。

〔課題〕学校教育で「総合的な学習の時間」の重要性を認識し正しい指導力を発揮して欲しい。社会教育が子どもの自然体験を如何に支援するか。社会の有り様を子どもの視点で考える。

3 まとめ：里やま問題解決のキーワードは教育にあり！

- 現状
  - ・物が豊かな社会になった半面、人の心の問題が深刻化
  - ・子どものキレル・引きこもり、少年犯罪が増加
  - ・子どもの遊びが家庭の中でのテレビ・ファミコンが増加
  - ・「里やま・自然体験」が減少
- 結論
  - ・基層文化の根を腐らせてはならない。里やまの疲弊は都市の凋落につながる
  - ・里やまでの自然体験は人としての大層をつくる
  - ・自然体験は子どもたちの感性を磨き、教育(生きる力の源泉)である
  - ・子どもの遊び・自然体験「時間・空間・仲間」の三間の確保は大人の責任
- 課題
  - ・学校教育における総合学習の重要性の正しい認識
  - ・社会教育が子どもの自然体験の如何に支援するか
  - ・社会の有り様を子どもの視点で考える




## 4 里山と森林・林業

森林林業分科会は山武杉の産地、東金市を???にして、東金市役所との共催で分科会を開きました。

4. 里山と森林・林業 代表: 神田忠弘  
市民の暮らしと森林の未来 ~森をつくる地域循環型の暮らし~  
共催: 東金市

- 自然体験:
  - 日時 2005年4月30日(土) 9:30~ 参加者 49名
  - 受付開始 東金文化会館2階エントランスホール
  - 10:00~12:00 森林ウォッチング
  - 花の園の森へあじはの森
- シンポジウム:
  - 日時 2005年4月30日(土)
  - 会場 東金文化会館2階会議室 参加者 53名
  - 昼食、交流
  - パネラー:
    - 司会 兼: 山武市森林組合 組合長
    - 東金市建設部都市整備課 東金市経済環境部農政課
    - 東金市経済環境部環境保全課
    - 東金市経済環境部農政課 花の園環境情報センター
    - コーディネーター: 神田 忠弘・はんむフォレスト
  - その他パネリス:
    - 東金市建設部都市整備課 東金市経済環境部環境保全課
    - 東金市経済環境部農政課 花の園環境情報センター
    - はんむフォレスト
  - プレゼント 東金市建設部都市整備課から花の園をプレゼント




午前は東金市民がつくる?森林公園をウォッチングし、午後はパネルディスカッションを行いました。森林が美しかった過去について知り、現在の状況を理解して、森林の未来を考えようというのがパネルディスカッションの題です。生活資源の多くを森林に依存していた時代は、地域の暮らしと森林が美しく調和していたという過去の話が

パネルディスカッションの???でした。現在、地球の温暖化が大きな問題となっている中で木材が理想のエネルギー源と言われながら、木材業界のなかでは端材?や???の処分に困っていること、利用しようとするれば現在の会社?の中で利用できるテクノロジーが身近にあること????とし、市民が木材の産地、エネルギー源としての特質?された産地に暮らしている恩恵に改めて気づくことが森林再生に関心をもつ第一歩になるのだと考えました。東金市の田んぼの学校の取り組みからは、林業????。田んぼの学校は農民が遊休農地を利用して有償で一般市民に農業指導する農業の一形態ですが、農民の発祥の背景には、農業という職業の効率性の自覚と農業者としての誇りがあります。森林所有者に森林の公益性と林業の重要性をしっかりと自覚されてこそ、市民参加の森作りのあり方が明確になってくるものと思います。

4 まとめ：地域循環型の暮らしが森をつくり、地域をつくる!

- 現状
  - ・戦後の無理な拡大造林の後、森林の手入れが出来ていない
  - ・東金市は市民による森づくりなど、市民の自然体験を支援している
  - ・山武杉を活用した住まいづくりなど、地域循環による森林再生運動の実施
- 結論
  - ・森林の木材生産以外の多面的機能を守るために人の手が入る必要がある
  - ・地域循環型の暮らし方が、地域の森や自然を守る力になることを再確認する
- 課題
  - ・木質バイオマスエネルギーの利用など、森林が暮らしと結びつく仕組みづくりが必要である
  - ・林業が産業として成立する形で市民参加と行政の協力を考える必要がある



昨年の第一回シンポジウムでは、市民、森林所有者、行政のそれぞれの役割に応じた総合協力システムの構築が必要であると提言しましたが、今回はそれを受けた一つの成果として、継続的な議論の場をつくることのできたものと思います。

## 5 里山と竹

竹分科会では里山と竹害を取り上げました。4月30日東金文化会館で行いました。

5. 里山と竹 代表: 田代武男  
里山と竹害について

- シンポジウム:
  - 日時 4月30日(土) 10:00~12:00まで
  - 場所 東金文化会館2階 第二会議室
  - 参加者 22名
  - 竹害について説明
  - 竹についての相談、質問の実施
  - メンバー:
    - 田代武男(竹研究会会長)
    - 田中昭三(竹研究会理事)
    - 林 正治(竹研究会理事)



シンポジウムでは、放竹林あるいは竹害についての説明、竹について困っている方いれば相談に乗り、竹についてのいろんな質問を出し、それに答える形で行いました。里山

は本来美しい竹林で覆われていました。美しい竹林は日本の原風景です。竹馬の友と言われますように、これまで子どもと竹とは切っても切れない関係になりました。ところが、この40年の間に里山をとりまく環境は大きく変化しております。里山の荒廃の一つの原因は放置された竹林にあります。放竹林は里山の生態系に悪い影響を与え、災害のもとになっていて、災害の危険性が最近指摘されています。写真をご覧ください。放竹によって裏山ががけ崩れを起こしている様子です。真竹や孟宗竹では地下茎が30センチまで伸びるのですが、放竹林では地下茎が弱り、一般的に考えられているよりも頻繁にがけ崩れが起きている。その30%から40%が放竹林が原因ではないかと調査し、対策を考えていかなければならないと思っています。子どもたちの健全育成には美しい里山と美しい竹林が欠かせません。そのためには放竹林の枯策などの竹林の整備が急務です。課題としては、竹は地下茎で繁殖する特性があり、常識的な対応では歯が立ちません。竹についての基礎的な知識の普及が必要です。放竹林は生物の多様性を低下させ、土砂災害を起こさせているという危険性を多くの方に認識してほしいと思っています。拡大する竹林を阻止するには個人では難しいと思われるので、行政等による対応が望まれます。

5. まとめ 里山問題解決には竹の枯策、竹林の整備が急務

- 現状
  - 1 里山の美しい竹林は、日本の原風景である。「竹馬の友」といわれるように、これまで子供と竹とは切っても切れない関係にあった。ところがこの40年間に里山をとりまく環境は大きく変化している。
  - 2 里山の荒廃の一因は、放置された竹林にある。放竹林は里山の生態系に悪い影響を与え、防災の面から危険性が指摘されている。
- 結論
  - 1 子供たちの健全育成には、美しい里山、美しい竹林が欠かせない。
  - 2 里山を守るためには、竹の枯策、竹林の整備が急務である。
- 課題
  - 1 竹は地下茎で繁殖する間、特性があり、常識的な対応では歯が立ちない。竹に対する知識の普及が必要
  - 2 放竹林は生物多様性を低下させ、土砂災害を頻発させる。危険性への認識が求められる
  - 3 拡大する竹林を阻止するには、個人では無理である。行政あるいは研究機関に働きかけ、その対応が急務である



## 6 里山と食

### 6 里山と食

食分科会では5月14日に大山千枚田棚田倶楽部で開催しました。

6. 里山と食 代表:遠藤陽子 車座食談義 みんなで語ろう! 千葉の食

●自然体験:  
日時 2008年6月14日(土)  
会場 鴨川市 大山千枚田保存会棚田倶楽部 参加者 36名

1 太巻き寿司作り  
指導 千葉伝統食文化研究会  
監修 美子さん、荻原 香子さん、杉野 幸子さん、伊藤 美美子さん、山形 礼子さん

2 車座食談義「みんなで語ろう! 千葉の食」  
パネラー 石田 三示さん(大山千枚田保存会理事長)、棚田 嘉美子さん(鴨川市観光協会常任理事)、菅沼 弘夫さん(子ども・学芸会代表)、平本 紀久雄さん(千葉の食と遊楽を考える会代表)、美濃輪 中よしさん(千葉県生活改善委員)、山口 孝さん(鴨方公務員)、監修 美子さん(千葉伝統食文化研究会)

コーディネーター 遠藤 陽子(千葉自然学校理事)



その昔、私は、農家の女性から昭和30年ごろまでは「谷津田は米びつ」だったと言う話を聞いて深い印象を受けたのを覚えています。日照が続いても大風が吹いても周りの里山に守られた谷津田というのは、大きな被害を受けることなく安定的に米がとれた田んぼだったので。

春には、山からの絞り水は冷たいので、水を田の周りをめぐらせて温めて田植えに備えました。周りの山に芽吹いた若葉を肥料にしました。そして山から採った山菜が食卓にのぼり、田植えが終わたら「さなぶり」、あんころもちを作って疲れた身体を休めました。

秋の農作業が終わったあとには、「山まで」といって山に入って1年分の薪を蓄えました。山仕事の最後の日には、山の神に感謝して「とり飯」を作って家族でいただきました。

このように、自然と深くかかわりながら、豊かな実りと家族の安泰を祈る暮らしの中で年中行事が生まれ、郷土料理が伝えられて来ました。これを次代に伝えていくにどうしたらいいかということで話し合いました。

まず午前中は郷土料理の体験ということで、みんなで太巻き寿司作りをしました。太巻き名人の龍崎先生に教えてみんなでつくって、それをお昼にしました。

午後は「車座食談義」里山、海とかかわる暮らしの中で生まれ伝え続けてきた郷土料理について語り、次代に伝えていくために今必要なことについて語り合いました。

先人の知恵を掘り起こし、伝えるため食文化フォーラムを立ち上げて活動している事例や子どもを対象に食文化啓蒙事業に取り組んでいる事例が紹介され、今後も郷土料理を伝えていきたいというのが皆さんの意見でした。それでは、継承して行くにはどうしたらいいかということでは、千葉には郷土料理は多いが、食に対する情熱が薄い。他県では、新聞社が郷土料理を掲載したり、本を出版したりしている。

6.まとめ: 今、郷土料理や食について考えていること

- 現状
  - \*先人の知恵を掘り起こし、伝える活動をやっている。食文化フォーラムを立ち上げた。
  - \*伝承活動を進めたいと、子どもを対象に食文化啓蒙事業に取り組んでいる。
  - \*子どもの頃の母の弁当が懐か。子どもたちにいまの食をどう伝えるかが課題。
  - \*自分達が普段食べているものが旨いもの、暮らしに自信を持ち、これを外の人たちに伝えていきたい。
  - \*一律の栄養重視の食では、味覚が育たない。
  - \*千葉の海岸は全国フーズ3、九十九里海岸の味が失われている。
  - \*山辺郡竹の農家のお母さんたちが太巻き研究会を立ち上げ活動してきた。
- 課題と結論 今後取り組むべきこと
  - \*千葉の郷土料理は多いが、食に対する情熱が薄い。
  - \*地元では「おかし」の得意なおぼあちゃん、まだまだ名産品がある。
  - \*地元の漁師は、ゴンズイ・ハコガなどのおいしい食べ方を知っている。
  - \*地域のおいしいものを集め、弁当コンテストなどやって、これをコミュニティビジネスとして展開させたい。
  - \*棚田の米がなぜおいしく?棚田は地すべりの復興の産物。
  - \*おいしいものをどう普及するか、それには価値観や経済行為の転換が必要。観光業者は一律の料理で知恵がない。だからフォーラムを立ち上げた。



今、農業改良普及員たちが調査したものなどを残して行くどりょくが必要。昔はあつまりがあると「揚げ重」を皆で持ち寄ったものだ。もう一度そういうものを取り戻す意味で、食の文化祭などをやったらどうか、或いは地域のおいしいものを集めて「南総里見八犬伝弁当」を作っている。コンテストなどやって地域のおいしいものを集めコミュニティビジネスにすすめていきたい。子どもに対してはやはり、身体を動かし、おなががすいた経験をさせ、「うまい!」という感動を体験させたいなどが話し合われ

ました。

この中で、ただ一人の子供参加の4歳の彩花ちゃんは、午後は田んぼの生き物観察ともち草をつんでお団子を作りました。3時のおやつは彩花ちゃんの作ったおいしいお団子をご馳走になりました。

## 7 里山と芸術

里山と芸術分科会では5月15日に千葉市緑区土気大藪池谷津田を舞台にして創作ワークショップ「ヤツダノヤハヤツダノヤ」というタイトルで野外体験の企画を行いました。

**7 里山と芸術・分科会** 代表：宮村 賢治  
谷津田における人と自然とアートとの出会い

日時：5月15日(日) 10:00～15:00  
場所：大やぶ池谷津田(千葉市緑区越智町)  
参加者数：約80名

『工作ワークショップへやぶどのやはやそのや!〜』

- ドームをつくらう!  
竹を使ったドーム作りと間伐材を利用した大きなテーブル作りを行いました。  
講師：横田耕明(グループ2000)
- 野草で天ぷら!  
大やぶ池のまわりを散策して野草をとり、天ぷらにしてみました。またチャリカフェという移動式カフェも出現し、参加者に飲み物を振る舞いました。  
講師：姉川隆・福田洋
- 楽器をつくらう!  
竹を使って楽器を作り、みんなで演奏しました。  
講師：小林正幸(ウッディ工房)




当日は小雨のぱらつくあいにくの空模様だったにもかかわらず、途中参加の方やスタッフを含めると約100名の人たちが集まってくれました。小学生以下の子ども達が多く、開会式前から元気いっぱいにはしゃいでいました。午前中は班を二つに分け、机、椅子制作、竹を使った道具作りを行いました。机づくりでは丸太切り、釘打ち、道具づくりでは竹を重ねて縛り、組み立てるといった力仕事が多かったので、中心となったのは親御さんやスタッフの方たちでしたが、子ども達もなお???とサポート役としてがんばってくれました。お昼は野草のてんぷらです。野草は周辺からとりあえず摘んできたもので、ほんとにすごろうところに生えていたものばかり、これが以外に臭みがなく、くせがなくあっさり食べられました。またこの時、私達の企画であるチャリカフェという自転車にお茶などを積み込んで、いろんな所でカフェを開くという装置ですが、これで参加者のみなさんに飲み物を振舞い、好評を得ていました。午後は竹を用いたの楽器づくりです。これには親も子も参加者全員が熱中していました。ぱっと見は簡単そうなのですが、なかなか鳴らない、だからこそ楽しく夢中になれるという具合で、みなさんどんどんのめり込んでいました。そのせいか出来上がったものはかなりのお気に入りになったようで、常に手の中にもち、ことあるごとにピーと吹いたりしている人もいました。一度吹くと???ようです。ワークショップ終了後、???また参加したいという声を多く頂いた一方で、このような話があったことは知らなかったという方も多くいらっしゃいました。

????????????????????(会場に響いてしまい全く聞き取れません)

まとめ：この谷津田がたくさんの人によって、来て、楽しんでもらおう!

- 現状  
千葉市内に住んでいる方たちにも「大やぶ池谷津田」のことがあまり知られていない。  
この谷津田に残土・産廃を投棄しようとする動きがある。
- 結論  
この地域のことを、もったくさんの人たちに知ってもらう必要がある。  
この谷津田は自然豊かな素晴らしい場所、何かこの場前性を活かすことを考えてほしい。  
子どもたちだけでなく、大人たちを取り込むような企画作りが大切になる。  
一過性のイベントではなく、地域に根付くような活動を行っていくことで、この場所の継続的な活用が図られる。
- 課題  
この谷津田を多くの人にとってもらうために、どのような表現が考えられるか



野草の天ぷら

## 8 里山と医療・福祉

私達は先ほど教育分科会で話をされた宮村さんたちと共に今回のワークショップを行いました。メインテーマを谷津田に置ける福祉のあり方と新たな相互理解や交流の試みということでプログラムを行いました。

**8. 里山と医療・福祉** 代表：横田 耕明  
谷津田における福祉の有り方と新たな相互理解や交流の試み

●野外体験:  
日時：5月15日(日) (雨天の場合は5月29日(日))  
場所：千葉市緑区土気大藪池谷津田

子ども何らかの障壁のある方々を中心に工作案を行う。参加者が個々の特徴を認め合い、助け合いながら楽しく活動することにより、地域福祉の在り方を模索する。

竹を使ったドームづくりと間伐材を使った机づくり  
建築家・グループ2000代表の横田耕明

野草をとり、てんぷらを作る・昼食  
参加者は谷津田を散策して野草を採り、随時てんぷらに食べて

チャリカフェで飲み物を振る舞う  
(チャリカフェという移動式カフェ)

竹を使った楽器づくりとそれを演奏した演奏  
ウッディ工房・小林正幸  
里山の仲間たち 林




プログラム内容は先ほど宮村さんが言っていたので大体は分っていたかと思いますが、机づくりなどでは子ども達を始めとして一生懸命工作に打ち込む姿が印象的でした。この大藪池周辺は医療福祉施設が多い旧農村地域で現在の景観というのはNPOや地元住民のみなさんの活動で維持されております。

8 まとめ 工作ワークショップ・五月の谷津田における福祉活動

- 現状  
大藪池周辺は医療福祉施設が多い旧農村地域。  
現在の美しい景観はNPOや地元住民の活動で維持されている。
- 結論  
小雨に100人前後が集会、自然福祉への関心の高さを確認。  
五月の谷津田を存分に体験、予想を超える活発な交流と創造が実現した。
- 課題  
谷津田をフィールドとした地域福祉の基盤作り。  
活動が恒付くには地道な呼び掛けと定着期が必要で大切。  
今年は夏と秋に行事を予定。



当日は小雨が降る中100人前後の多くの人々が集まっていたいて自然福祉への関心の高さを確認し、予想を超える活発な交流と???が実現いたしました。今回のワーク



環ってどういうものなの？特に雨水が降って地下に沁みて、湧水として出てくるまでの段階の話をしていただきました。

**11 水循環** 代表: 瀧尾繁志  
「健全な水循環」～恵み豊かな水を子どもたちへ～

●シンポジウム:  
日時: 5月21日  
場所: 中央学院大学6号館3F(635教室)にて  
講演 佐倉 保夫氏 (千葉大学理学部地球科学科)  
事例発表  
(1)「印旛沼のたけし行動」 三品 浩史氏(千葉環境土壌部)  
(2)「名戸ヶ谷湧水と子どもたち」 藤崎 哲氏(名戸ヶ谷ピオトープを育てる会)  
(3)「手塚川除染事業と畔田での市民活動」 小野 田英千代氏(くノノ人と自然をつなぐ仲間)  
意見交換会 コーディネーター 瀧 和夫氏 (千葉工業大学生産環境科学)

●野外体験(予定)  
「親子で体験！ 船に乗って手賀沼の水調べ・生物採集」  
日時: 6月12日(日) 10:00～15:00  
集合場所: 手賀沼水の鏡前 場所: 手賀沼周辺



会場写真



多少難しい部分もあったのですが、なるほどと思える部分もたくさんありました。あと、事例発表というかたちで、行政がどういう方向で動いているのか、ということで千葉県の方が印旛沼の周辺????????というものを、それから????????の湧水とお友達ということでピオトープを比べて?????となる話。佐倉市にある?????にあ????????という川がありますが、これを????????と言う話。これは佐倉市と協働????でやっているということです。まとめた内容としては、現状としては県や県民と一緒に流流域の人たちが水循環を良くしようという動きがそろそろ始まってきました。これは、3年計画、10年計画ということでやってきていますが、徐々に広がっていかばいいかなというところ。それから課題としては、我々が子どもたちにそれをどうやって伝えていくかということなんですが、地下水をいかにキレイに保つかということで、それは、雨をいかに地下へ流していくかということ行政とみんなでそれぞれ考えていく????????があるのかなあということ。

11 まとめ

●現状 ・印旛沼流域で県民・行政が水循環の健全化に取り組んでいる  
・市民は谷津田などで汚れた水の入り混じった中で活動している。

●結論 ・地域の肩が水循環をよくすること(何を望み、何を残すか。合意を得ること)

●課題 ・地下水をいかに保つか...  
雨水の浸透  
灌漑域の保全...など  
・地表に流れる豊かな水辺作り




我々が気持ち癒されていくためには、子どもたちにも伝えていかなければならないところですが水量にあふれる川、世界に????がキレイに残されていくということが大事なのだという結論に達しました。

## 12 里山と野生動物

私達は、今日の午前中に里山の野生動物との共存を考える、というテーマで2時間ほど分科会をしました。

**12 里山と野生動物** 代表: 中野真樹子  
里山の野生動物との共存を考える

●シンポジウム:  
日時: 6月21日  
場所: 我孫子市中央学院大学6号館5F(657教室)にて

基調講演 羽山 伸一  
(日本獣医畜産大学獣医学部助教授: 野生動物学)

パネルディスカッション  
・羽山伸一(同上)

・東原 裕浩  
(NPO法人千葉まちづくりサポートセンター副代表)

・清水 享  
(サージミヤワキ・電気研研究員)

・後藤 章彦  
(東京科学大理工学部アニマルサイエンス科4年)

・千葉県→市町村の担当者(予定)  
・被害農家の方(予定)



会場写真



最初に基調講演として、羽山伸一先生、日本獣医畜産大学獣医学部助教授、野生動物学の先生でもあるのですが、50分くらい講演していただきまして、その後、パネルディスカッションを一時間半くらいかけて4人の専門家の方々をお招きして活発な議論を行っていただきました。現状としては、千葉県は現在外来種の問題が浮上しています。それは、????ソウルとか、これまでは千葉県には全体的にいなかった????が増えているというのがあります。また食物被害、これは非常に深刻な問題で、猿、猪、鹿といった大型野生哺乳類による作物被害が深刻で、それにとまってニホンザルの駆除数も千葉県は全国で一位という現状にあります。これも県民(専門?)の方でも知らない人が多いのではないかと思います。????としては地域づくりとミックスして民間方????????????????と答えていく必要があるということです。住民と情報を共有したりやる気を出させたり????????をとということ、課題としては、女性

12 まとめ 野生動物対策は町ぐるみで

●現状 ・外来種: 面積の割りに多い外来生物  
・農産物被害: 被害額ばい、無秩序な対策によるサル被害の拡大

●結論 地域作りとリンクし、民間をも交えた野生動物被害対策  
→ 住民への説明、理解  
→ やる気の醸成、戦略計画の樹立

●課題 ・子ども、女性も含めたさまざまな立場からの「地域の将来」イメージの構築  
・専門技術者の配置、自然環境管理機関の創設




や子どもも含めた様々な立場や視点からの、地域の将来といったイメージをきちんと構築し、また専門技術を配置したり、自然環境を????????したりしていくという課題が挙げられていました。以上です。

### 13 里山と文化と伝統

講演会の内容ですが、一つは縄文時代の話で、縄文時代私達はどのような生活をしていたのか？と言う話しです。

**13. 里山と文化・伝統** 代表:加藤賢三  
遺跡からみた里山景観

●シンポジウム:  
日時:5月21日(土) 10:00~12:30  
場所:我孫子市中央学院大学6号館5F(658教室)

●講演(遺跡からみた里山景観)  
1. 縄文時代 上野秀明  
《(財)千葉県文化センター上席研究員》  
2. 弥生~中世 菅谷 隆  
《千葉県教育庁教育振興部文化財課  
文化財保護室 主任文化財主事》

●聴覚文化 コーディネーター  
西野 元(国士舘大学 文学部非常勤講師)

●野外体験(予定)  
場所:手賀沼および近郊  
日時:6月12日(日) 10:00~15:00(小雨決行)  
備考:我孫子市との共催、水産課分科会との協働



会場写真



会場写真

生活する中で集落があります。するとゴミが捨てられていくわけですけど、それは文化遺産として貝塚として理解しているわけですけども、縄文時代からゴミ問題というのがあって、それはリサイクルという形で上手に利用されてきています。

13. まとめ 遺跡に学ぶこれからの里山のあり方

- **現状** 私たちの暮らしは利便性を追求した結果大きく変わってきた
- **結論** 縄文時代から資源循環型社会が作られている、これをもう一度学ぶ。
- **課題** 利便性のカベをどう乗り越えられるか



それでその生活を見ると、???????。(分かりません) 次は縄文時代私達の? ? ? ? ?としましてはこういうような遺跡に学んでこれからも自分達の生活も送ればと考えるところです。現状は自分達が利便性を追求することによって様子が変わってきたので、今日勉強したように、縄文時代から循環型社会が作れると、それをもう一度学ぶ必要があります。その時に私達が一度獲得した利便性を犠牲的に考えられるかが課題になります。

### 14 里山と子どもの健康

私達は去年は里山のシンポジウムに残土産廃ネットとして参加しました。

残土産廃はご存知のように不法投棄が千葉県の中にたくさんあります。全国の3分の2が千葉県に入っているとされています。銚子などはものすごい不法投棄で地下水の亜硝酸窒素が24ある、普通の所で8あると病気になるといわれているものが24あります。そういうものをちゃんと過する装置をつけていてもそうなんです。冗談じゃな

いです。私達はその不法投棄をなんとか止めさせてそこに森を作りたいということを考えております。

**14 里山と子どもの健康** 代表:井村弘子  
化学物質から子どもを守る

●シンポジウム:  
日時:5月21日  
場所:我孫子市中央学院大学6号館5F(658教室)

講演 藤原寿和氏  
《(有)化学物質から子どもの健康を守る  
千葉県ネットワーク代表》

講演 報善法子氏《佐倉からの報告》

●シンポジウム(予定)  
残土処分と森林保全  
場所:市原サンプラー  
日時:6月25日(日) 9:50~12:00 見学  
13:00~17:00 フォーラム 事後と討論会



会場写真



会場写真

その残土産廃ネットは同じように、?????ですが、「有害物質から子どもを守る千葉県ネットワーク」というグループがあります。里山と子どもということでしたが、残土産廃よりもこの子どもの健康ネットのことで、今年はお話し合いをするということで、みなさんにお集まりいただきました。

今、現状を申し上げますと、子ども達の中に科学物質による健康? ? ?が確実に増加しています。しかし、国や県も化学物質の取り組みには非常におくれています。外国の状態とくらべてみますと、日本は大変な状態です。日々住民には新たな情報が提供されています。新聞にもまた色々なところでも宣伝がたくさんされています。ですが生活の利便さを追及するによってとにかく将来のある子供たちをどう守っていくか本当にもう皆さんの関心がまだまだなんです。ですから結論といたしまして子供たちの教育や家庭の中で化学物質に関して不足しているいろいろな機関を通じて実態に対処した方法を知らせていくことが必要と私どもは思っております。世の中のお父さんお母さんたち、このあふれ出す有毒な化学物質を間違いなく情報として流すことができることを、正確には身近な化学物質をその影響、リスクを調査して多くの市民に知らせて、そしてメーカーや行政に対策していただく、そういったことをこれからの課題にしたいと思います。

14 まとめ 化学物質から子どもを守るために、私どもは地道な活動を皆でしていきましょう

- **現状** 子どもたちの間に化学物質による健康被害が確実に増加。しかし、国も県も化学物質への取り組みが遅れている現状がある。  
市民は生活の利便性追求のみに走り、それらのリスクが子供らの将来に影響を及ぼすことを追求しようとしていない現状である。
- **結論** 子どもたちの教育や過程の中で化学物質に関して不足している、色々な機会を通じて実態に対処する方法を知らせていくことが必要とおもわれます
- **課題** 世のお父さん、お母さんたちに、このあふれ出す有害化学物質を、間違いのない情報として流すことが出来るかを、生活のなかの身近な化学物質と、その影響リスクを調査し、多くの市民に知らせるとともにメーカーや行政に対策を提案していくことを考える

